

山岳遭難防止セミナー

「冬山を安全に登るために～長野県警察山岳遭難救助隊の活動から学ぶ～」

日時：2023年11月28日（火）19：00～20：30

会場：日比谷図書文化館

講師：長野県警察山岳遭難救助隊隊長

主催：公益社団法人 日本山岳会 遭難対策委員会

標記セミナーについては、長野県警察山岳遭難救助隊隊長より、事故や遭難の事例、救助の実際などについて、スライドや動画を投影しての講習でした。概要を以下のとおり報告します。

長野県の2023年度の遭難件数297件（1月～10月）で、過去最高であった300件に、2カ月を残してあと4件に迫っており最悪の状況である。

夏の遭難では、「60才以上の遭難者」が5割、40歳以上で言えば8割位になる。他方、冬山では、20代から50代が8割を占め、60歳以上は16%となり、中年層、若年層にシフトする。

冬山の遭難態様では、①登山中の凍結斜面や岩と雪のミックスした岩稜等での滑落、②バックカントリー滑走中の転倒、衝突、滑落、道迷い雪崩、③アイスクライミング中の転落、落氷負傷、③単独登攀中の道迷い、漫然と滑走し現在地が把握できないなどである。

冬季遭難の死者・行方不明者の構成比は18%で、他の季節よりも高く、負傷者と合わせた死傷者数の構成比は6割を超えている。冬季の遭難は、自然環境の厳しさと合いまって深刻化する傾向にある。冬山では小さなミスや判断の誤りが深刻な事態を招き、救助活動も厳しい状況である。以下、登山関係の遭難事例（概要）である。

1. アイゼン歩行中の滑落転倒による死傷事案

(1) <五竜岳における滑落遭難>

前日に仲間と二人で五龍スキー場から入山。遠見尾根途中で幕営。当日は五竜岳山頂を目指し早朝から行動。登頂後、下山を開始して間もなく、富山県側の斜面をトラバース中、アイゼンが滑り約20メートル滑落。負傷及び寒さのために行動不能となり、ヘリにより救助した。

<対策>

滑落事故は、「下り」から「トラバース」へ切り替わるポイント、斜面に対する重心や足運びなどの動作が変わる場所では要注意。同行者がいれば、足の置き方、ピッケルの突き方など細かく助言すること。

(2) <八ヶ岳石尊稜における行動不能遭難>

石尊稜に登るため、60代の男女4人パーティーが午前8時に宿泊していた赤岳鉱泉を出発。冬季の八ヶ岳登山に不慣れなメンバーがいた上に、携帯していたロープが1本だったこともあり、日没を過

ぎてもルートの中にも到達できず、前日宿泊した山小屋を通じて救助要請があった。登って来たルートを下降すれば遭難にならないが、「装備がない」「技術がない」がための救助要請である。

<対策>

- ① 力量に見合ったルート選定、② SNSにあふれる快速記録を鵜呑みにしない、③必要な装備品の携帯、④登る技術だけでなく下降の技術の習得。④早めの撤退判断、⑤対処できないと判断した際は、それ以上状況を悪化させない対応をとる。

(3) <八ヶ岳柳川における落氷遭難>

アイスクライミング中、崩落した氷瀑が体に当たり、体勢を崩して氷壁に身体を打ち付け、右足を負傷し行動不能となった。付近の別パーティーから救助要請があった。

<対応>

地形及び視界不良のためヘリ救助はできず、地上搬送。救助隊到着まで時間を要する事から、冬季は低温対策が必須である。

(4) <八ヶ岳ジョウゴ沢における転落遭難>

硫黄岳ジョウゴ沢大滝付近にて、アイスクライミング中にリードしていた1名が、足を踏み外し約2メートル転落。転落時に肩に掛けていたテープスリングが首に掛かり一時的に意識不明となり救助要請があった。

アックスの脱落防止は、ハーネスに連結するが、肩のタスキ掛けスリングに脱落防止を連結していたため、これが墜落時に首にかかった。

<対応>

頸椎損傷が疑われストレッチャーで搬送。この事案以外にもアイスクライミング中の転落事故は、ストレッチャーで搬送せざるを得ない重症事案が多く、アイスクライミング中の遭難は、重大事故に直結する傾向がある。

例として、①アイゼンを引っかけ足首を損傷、②グランドフォールし全身打撲。③スリングが絡まり首吊り、④中間地点が崩壊し墜落、⑤氷瀑の崩壊により負傷など。

<対策>

高性能な専用アックスとアイゼンがあれば登ることは容易だが、高度なリスク管理が必要。経験と正しい技術を有する者の同行、ガイドの活用、講習会などに参加する。

2. 道迷い事案、地図を読む、地形を見ることができない登山者による道迷い、視界不良時に行動を強行した道迷い

(1) <八ヶ岳ジョウゴ沢における道迷い遭難>

単独で「硫黄岳」登頂後、「赤岩の頭」か「赤岳鉱泉」に下山中、ジョウゴ沢方面へ迷い込み、行動不能となり救助要請。状況から、アイスクライマーの踏み跡をルートと誤認し迷い込んだ。

(2) <八ヶ岳赤岳における道迷い遭難>

単独で山梨県との県境に位置する県界尾根を下山中、尾根を外れ、沢に迷い込み行動不能となり救

助要請した。

(3) <中央アルプスに於ける単独登山者の行方不明事案>

管轄の駒ヶ根警察署に「千畳敷から駒ヶ岳に入山した登山者と下山後会う予定になっていたが、朝、連絡を取りあって以降、連絡が取れていない」との通報を受理。年末年始営業していた山小屋に確認したところ、当日の朝、当該男性が吹雪の中小屋を出発したことを確認した。

男性は、山小屋を出発する朝にスマホを紛失。頼みの地図アプリを使用できず、紙の地図もないまま吹雪の中、下山を強行し、予定とは反対側の北側の谷に迷い込み行動不能となった。

<対応>

下山路とは異なる沢へ進むアイゼン跡を発見し救助に至る。男性発見時の指の状況、三度の凍傷。八ヶ岳の麓の諏訪中央病院によれば、「近年登山者の凍傷事例が多い」とのことである。

<対策>

凍傷対策は、①行動中は常に血行の有無を意識する、②手を振る、指を動かす等して血行を促進、③できるだけ素手にならない、④アイゼンの脱着もグローブを装着した状態でできるよう練習する、⑤異常を感じたら早期に医療機関を受診する。

(4) 冬季の道迷い遭難の特徴>

① 体力のある単独の中高年男性が多い、②沢や谷をルートと誤認して進入する、③思い込みでどんどん進む、④吹雪など視界不良時に行動している、⑤救助者側の想像を超える場所に入り込んでいる。

<対策>

① 事前の机上登山、②行動中は紙地図やコンパスを持参し、こまめな現在地の確認、③おかしいと思ったらすぐに引き返す、④悪天候時は行動を控える、⑤どうしても迷ったら通報、体力を温存する。

以上、登山の事故事例を中心に概要を記載した。身近な山域である八ヶ岳の事例が多く、その多様な事例が参考になる。

また、道迷いの事例では、GPSの利用者も多く、尾根ルートにも拘わらず、沢や谷筋に入り込んでいる事例に、地形など読図の重要性を再認識させられる。(報告 K)

以上